

かつた。協調団体内部に於ける活動方針の自己批判と産業報國運動の線に沿ふ再出發の動きが顕著となつた。殊に産業報國聯盟の提唱であり、その發展に力を盡して来た協調會に於ては、最も顕著なものか認められた。即ち産業報國聯盟内に於ては聯盟独自の立場から産業報國運動に専心するためには協調會を擧げて聯盟に傾投せしめんとする協調會解消論が次第に表面化し、之れと同時に協調會内部に於ては聯盟の行き方が餘りに此時局に便乗せると快しとせお寧ろこの際同聯盟とさつぱりと分離すべきとの主張が強まり、之が本會内に於て意見の對立を生ぜしめて解消論者と存続論者との抗争を惹き起したものと如くであつた。斯くて本會内に大きな動搖が生じた。

のであつたが、この事態を收拾するため、前記の如く聯盟の改組を見たのであつた。水野副會長が聯盟會長の受諾に就いて、昭和十四年三月二十九日の本會評議員會に於て「――産業報國聯盟の運動は其の後漸次進展を致し居りますか、今般その役員も更に官民各方面の有力な方々に御依頼を致し、同時に不肖私に聯盟會長に就任方依頼があつたのであります。尤も協調會は聯盟の生みの親と言ふ様な關係で協調會の事業と聯盟の運動とは密接不可分の關係にありまして、形の上でこそ異つた團體では御座りませうが、事實上は一体と言ふ氣持で充分なる連絡協力と致して參らなければならぬと存じましたので御引受を致しませうか。――」と説明したことはこの間の消